



TITLE:

<批評・紹介>オリエンタリカ1

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

---

CITATION:

日比野, 丈夫. <批評・紹介>オリエンタリカ1. 東洋史研究 1950, 10(6): 504-504

ISSUE DATE:

1950-02-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145867>

RIGHT:

## 批評紹介

オリエンタリカ 1

東京大學東洋史學會編

昭和二十三年八月一日 大地書房刊

A 5 判 一八四頁 價九〇圓

オリエンタリカ發刊の噂を耳にして待望すること久しかつたが、つひにこの大冊を手にして同慶の念を禁じえない。わが「東洋史研究」だけが、本邦唯一の東洋史學専門の雜誌ではなくなつてきた。兄弟分の誕生である。心から將來の發展を祈らねばならない。

まづ巻頭から故白鳥庫吉博士の遺稿「卑彌呼問題の解決」(上)、津田左右吉博士「耶馬臺國の位置について」、榎一雄氏「耶馬臺國の方位について」、前田眞典氏「應神天皇朝といふ時代」等、魏志倭人傳などを中心とするわが古代史研究が盛である。ひろく東洋史全體の立場から耶馬臺國をとり上げ、大和朝廷成立の問題とも關連させて、この學界未解決の難問を一舉に決せんとする意氣込がみられる。勿論、在近畿地方説などは全く顧みられてゐない。白鳥博士のは五十四頁にして漸く半ばに達した大論文であるが、いままでのところでは九州北部からの日程里程の過大なるは、倭國の魏に對する警戒から出た作爲的誇張であると解せられたのが結論のやうで

ある。榎氏のはやはりこの過大なる里程記事に對して別の新解釋を與へられたもの、昨年十二月「歴史」創刊號の和田清博士「魏志倭人傳に關する一解釋」は、これとともに是非併せ讀まねばならない。前田氏の論文は、南朝に通交せる所謂倭の五王のうち、讚と彌とをそれぞれ應神仁德兩天皇に當て、從來の解釋を破つた新説である。

ついで、和田清博士「支那の國體について」は、支那は非常に古くから統一的國家に入つたので、その國家の基本的性格を統一的獨裁專制的なりとし、ために四民平等にして個人の自覺なく活潑なる文化發展には遅れたとする。鈴木中正氏「清朝の儉約令とその政策的意義」は、かかる社會經濟的政策の基礎をただ儒教的な教化と恩惠の觀念にのみ求めて満足されたのは迫力に乏しい。神田信夫氏の「嘯亭雜錄と其の著者」は、雜錄の十卷本と十三卷本とを精密に比較せられた書誌學的研究に、その著者に關する零語逸聞を丹念に集録されたもの。護雅夫氏の「高車傳にみえた諸氏族名について」は、北史高車傳に收録された二様の高車氏族名を、北魏時代の漠南及び漠北における二群の高車を示したものと解釋する。最後に江上波夫氏「内蒙の巨利貝子廟の實態」は昭和十九年の調査で、わが國人によるラマ廟の實態調査報告としては最も精密をきはめ、敘述の組織的な點でも注目に値するものであらう。長尾雅人氏の「蒙古學問寺」の一章もこれと併せ讀むとすこぶる興味深く思はれる。二三・十二・一(日比野丈夫)